

災害報告

鶴友苑における令和 6 年能登半島地震を振り返って

古木恵実子

介護老人保健施設 鶴友苑

【要旨】

令和 6 年能登半島地震で七尾市は震度 6 強を観測し、当苑も建物の損壊や断水、暖房のトラブルなどライフラインの断絶という直接的な被害を受けた。さらに寒冷な時期の発生で対応に追われたが、停電しなかったことは不幸中の幸いであった。

介護施設では日常的に食事や医療ケア、排泄支援を行い、ライフラインの断絶はそれらのケアに大きく影響する。また寒い時期には高齢者の健康、さらに断水により飲み水やトイレの使用にも影響が出て衛生面でも深刻であるが、そのような環境下でも入所者の安心や安全の確保が最優先課題となる。一方で職員自身も同じ被災者であるが、計り知れない強い不安やストレスを抱えながらも介護を止めることなく業務にあたってきた。同じ被災者としてお互いに気遣う姿勢が長期的な協力体制を築く上で不可欠である。

災害が過ぎ去った後も対応に追われた 1 年であったが、法人内外からの多大な支援に助けられた。今春、当苑は閉所となったが感謝の気持ちとともに 1 年を振り返り記録した。

Key Words : 高齢者施設, 地震災害

【はじめに】

当苑は七尾市田鶴浜町にある築 31 年、3 階建ての介護老人保健施設で、50 名の入所者が 2 階と 3 階で居住している。元日は自宅に外泊中の入所者を除き 44 名がいた。1 階は通所リハビリテーションを定員 1 日 25 名で週 5 日営業していたが元日は休業日だった。

発災時入所者は夕食のため食堂へ移動を始めていた。著者は数分前におきた震度 5 強の前震で七尾から田鶴浜へ向かっており、その途中で本震に遭った。道路の崩落や家屋の倒壊、電線の垂れ下がりなどで迂回を余儀なくされ、普段片道 15 分のところ 1 時間以上要した。苑の敷地内は液状化や地盤沈下、地割れが起き、玄関の自動扉は 30 cm 開いた状態で開閉できなくなっていた。苑内は物が散乱し窓ガラスの破損やクロスの亀裂、タイルの落下が至るところで見られ、発災時の苑内は煙が立ち込めたように

辺り一面が真っ白で呼吸ができないような状態であったという。隣接する診療所やもみの木苑との接続部がそれぞれ破断し最大で 20 cm の段差が生じ（写真 1）、場所によっては床や壁の傾きが確認された。



写真 1 併設施設との接続部破損

浴室は壁の一部が落ちて隣の建物が見え、1 階の倉庫や機械室の扉は歪みで開かず、さらに室内のマンホールの蓋が吹き飛ばされるなど、一瞬にして起きた地震の威力に驚愕した。

津波警報が発令されていたが、すでに外は暗く町も被災している状況から施設で待機した。万が一に備え、内服薬や最低限の介護用品は直ぐに持ち出せるように準備した。割れ落ちた窓ガラスや歪んだ窓枠の隙間から外気が入り込み、居室は外にいるのと変わらないような寒さだった。入所者のベッドを廊下や食堂に移動し、あるだけの寝具を集めて寒さを凌いだ。

【平時と変わらず運用できたこと】

厨房では夕食が準備されていた温冷配膳車が横倒しになり、食事が提供できない状況となったが（写真 2）、備蓄品や水分、補助栄養食品など非常用としての備えがあったため代用できた。発災時刻が日勤帯で、職員の人員が確保できたことから成し遂げられたと考える。さらに 1 月 2 日以降の食事はデリカセンターから配達され非常食の全粥とともに提供できた。断水で温冷配膳車や食器洗浄機などが使用できなくなったが、ディスポの食器類や非常食、栄養補助食品、水や清涼飲料水などの備えがあったことで物流が途絶え物資が入りにくい状況の中でも乗り切ることができた。

【平時のように運用できなかったこと】

発災当日の当苑日勤者はそのまま苑にとどまり翌朝まで継続して業務にあたっている状況であった。貯湯槽から冷温水発生機への配管の断裂が原因で暖房が停止し、復旧するまで入所者は食堂や廊下で過ごした（写真 3）。余震が幾度となく続く中、1 日中ベッド上という日常と違う生活環境を強いられ、急に行動範囲が狭められたこともあり、入所者は日増しに精神状態や活動性低下による日常生活動作が低下し、特に下肢の筋力低下が目立った。職員からリハビリを求める声が上がリ 1 月 4 日から個別にベッドサイドでリハビリを開始した。過酷な状

況の中で余裕があるわけではなかったが、その後 2 か月以上そのような環境下での生活が続くこととなり、早期にリハビリを行ったことは入所者の心身の不調軽減に大きく効果があったと考える。

断水にも悩まされた。入浴は勿論、市内全域が断水していたため洗濯業者の営業再開の見通しも立たず、着替えも不可能であった。災害用物資の体拭きシートを電子レンジで温めて顔や体を拭くことで精いっぱいだった。田鶴浜町は市内の中でも比較的早く断水が解消され、2 月には入浴が可能となった。しかし喜びも束の間、3 月に燃料用の地下タンクに水が混入しているのが判明し、ボイラーが使用できず再び入浴できなくなった。また下水管に複数の破損が見つかり、断水が解消されていても汚水が流せないなど復旧が進まず歯がゆい思いをした。さらに排水できずトイレが使用できなかったためポータブルトイレを設置し、プライバシー配慮に段ボールを組み立ての代用とした。

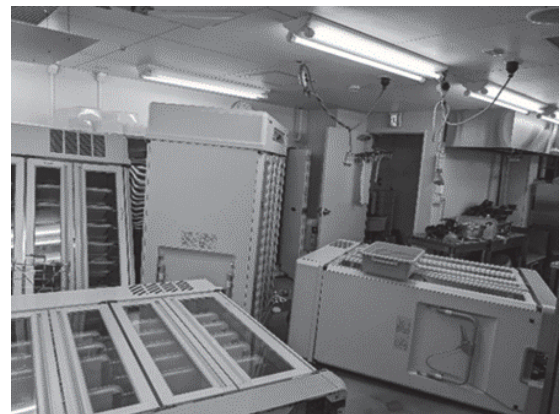


写真 2 発災直後の厨房内



写真 3 食堂での生活の様子

食事の問題も深刻であった。厨房は特に建物の傾きや地割れが酷く、排水中の油脂分を分離し貯留するグリストラップが破損した。汚水を流せないことから食器洗浄機が使用できず、ディスポ容器で非常食を提供する日々が続いた。非常食は通常の食事よりも量が少ないため栄養補助食品を追加したが、主食は味の無い白粥のため「食欲が湧かない」と摂取量が減少する入所者もあり栄養不足が心配された。1月7日からは味のついた変わりご飯や昼食には温かい汁物、その翌日からは果物やおやつを提供できたことで摂取量も回復していき一歩ずつ良い方向に向かっていった。

停止していたエレベーターは1月5日の点検で復旧した。しかし厨房までの通路の途中は破断していたため配膳車が通れず、スロープが作られるまでの間、厨房から階段を使って各階へ食事を運んだ（写真4）。

通所リハビリテーション（通所リハ）は1月4日には利用者全員の安否確認ができ一安心した。断水や暖房停止により1月は休業し、職員は入所棟の応援にまわったが通所利用者の状況確認の連絡は続けた。2月に給湯設備が復旧した時点で週3回の通所リハを再開した。玄関の扉はまだ動かず車いすが通れなかったため、1階訓練室の窓にスロープを設置して出入りした（写真5）。更に給排水の問題でトイレは2階へ上がってもらうなど不便な思いをさせた。ただ利用者から「お風呂も嬉しいけど皆の顔を見られたことが一番嬉しい」との言葉をもらい十分な環境ではないが喜んでもらえたことが本当に嬉しかった。断水解消後は1日でも早く通常営業を再開させたかったが、排水や食事などの復旧状況に合わせて段階的に営業時間を延ばしていった。町の被害状況は想像以上で、利用者は市外への避難や他の施設に入所するなどの影響で、通常営業を再開した4月の利用者数は震災前の半数に激減した。

【平時の運用に近づけるための連携・協力として】

各介護事業所を交えた地震対策本部会議で入浴サービスだけでも提供できないか検討を重ねた。そ



写真4 併施設間の段差にスロープ設置



写真5 1階リハビリ室から出入りする通所利用者

の結果比較的被害の小さかった中能登町にある法人内施設である在宅複合施設ほのぼのの浴室の利用を計画し、通所リハ職員の送迎で1月29日から給湯設備が復旧するまでの数日間に6～7名ずつ入浴させてもらった。また各事業所の被害状況の共有や職員の応援体制についても検討を重ねた。当苑は日常と違う生活環境下のため、発災翌日から約1か月間、各階の夜勤者を1名ずつ増員して対応していた。またほのぼのから日々応援にも来てもらっていた。当苑からは能登北部の介護医療院恵寿鳩ヶ丘へ1泊勤務で支援するなど法人全体で支援の体制

を築いた。

寒さを凌ぐことに最も苦慮したが、オイルヒーターや緩衝材、ブルーシートなどを早急に手配してもらった。特に国際ロータリー茨城地区からの提供である大型ファンヒーターが 1 月 22 日に届き、1 階の階段横に設置することで施設の上階まで暖めることができ支援のありがたさを身に染みて感じた。

断水に対しては全国からの給水車により、1 月 8 日から数十本のペットボトルやプラスチックケース、また受水槽 (9 t) を日々満水にしてもらえた。入浴に関しては、4 月に入浴が再開できるまで、ソフトバンクから提供してもらったポータブルシャワーを歩行が可能な入所者と終業後の職員が使用した。トイレは NPO 団体に提供してもらった屋外設置型トイレであるラップオンが重宝した。熱圧着で排泄物を密閉処理し臭いも漏れにくいためストレスがかからず有難かった。

さらに全国から恵寿総合病院へ送られた支援物資が、発災翌日から当苑にも届けられた。入所者用の非常食の他に職員にも水やカップ麺、パンなど保存の効く食料品や体拭きシートやディスポ食器、袋類などの生活用品が日々届けられたことで生活への不安が和らいだ。発災直後、職員一人一人の被災状況は大きく異なり、特に発災初期の数日間には生活の基盤が失われたことに対するショックと混乱、先の見えない不安から言葉を交わす余裕がなく、必要最低限の業務を淡々とこなす日々であったと感じる。そのような中、全国からの支援のお陰で職員の表情にも徐々に変化が見られた。「今日は何が届いた?」「これ美味しかったよ」と就業後には自然と職員が集まり会話することが「明日も頑張ろう」という活力につながる心の支えとなった。不安定な生活に小さな期待が生まれ、日常の会話にも少しずつ笑顔や明るさが戻ってきたと感じた。

【考察】

今回の発災は休日だが日勤から夜勤帯へ交代の時間帯であったため人員は確保できていた。夜勤帯であれば、複数の入所者を避難させるためのマンパ

ワーの確保が難しくなる。他へ避難を試みても周囲の道路の崩壊や家屋の倒壊で身動きが取れず、職員の人員召集にも危険が伴う。町の関係機関の方々も住民と同じように被災しており直ぐに協力体制を整えることは不可能に近いと痛感した。

災害時の事業継続計画 (Business Continuity Plan : BCP) を策定し定期的に避難訓練を行っているが、通常と異なる状況下でいかに迅速かつ的確に判断し行動できるかが重要である。それには法人内で使用し、職員個人のスマートフォンから利用できる Microsoft Teams (マイクロソフト社が提供しているメッセージングアプリ) が組織内の情報共有と連携に大いに活躍した。法人職員間において画像送信やチャット機能を用いて情報をリアルタイムに共有し、迅速に連携が取れたことによって、対応の混乱やさらなる被害を防ぐことができたと考える。

当苑の業務連絡は日頃から Teams を活用していたが、災害対応では苑の職員全体が活発に必要な情報を交換し合った。発災当日も日直職員が 16 時 33 分に第 1 報を発信していた。それに呼応して、各職員からも発信があったことで出勤の可否が判断でき、翌日以降の勤務調整がスムーズに行えた。業務に限らず道路状況やコンビニや給油所など町の生活情報の共有にも有効だった。緊急の備えとして、全職員が冷静に発信や反応ができるよう日頃から活用し慣れておくべきと考える。

職員同士のコミュニケーションの重要性も改めて感じた。職員の心のケアと感情の共有が確保されなければ適切な支援は困難である。短時間でも感情を共有できる空間や時間を設けることで、心理的負担を軽減できる。気持ちに余裕がない時こそ、お互いのねぎらいや感謝の気持ちを声に出すことの大切さを教えられた。

【結語】

職員が一丸となり介護を止めない! という姿勢を貫いてきたが、当苑は残念ながら建物再建が困難なため、今春閉所した。法人内外からの支援や関わってくれた多くの皆様に感謝しかない。